

遺 跡 報 告 会

四日市遺跡（平成 12 年度）

東広島市西条本町・栄町

1. はじめに

四日市遺跡はJR西条駅南側一帯に広がり、「四日市」という地名が示すとおり毎月四の日に市がある陸路交通の整備にともない西条盆地の商業・交通の中心地として栄えていたようです。

江戸時代（近世）に入るとこの地には郡用所・制札場・牢屋などが置かれ、賀茂郡の政治の中心地に位置付けられるようになりました。また、参勤交代の制度が設けられると、西国諸藩の大名行列が定期的に通過することから、近世山陽道（西国街道）の宿場の一つとして整備され、御茶屋（大名が泊まった宿）と呼ばれた本陣が置かれました。

発掘調査は平成 10 年度からはじまり、今年度で 4 次を数えるようになりました。今回の遺跡報告会では平成 12 年度の発掘調査の成果を報告していきます。

1. 四日市宿の概要

四日市宿は東の豊田郡本郷宿と西の安芸郡海田宿の間にある宿場です。宿場の範囲は、江戸時代の終わり（慶応元年・1865 年）に描かれた絵図面「宿駅四日市町並絵図」によると東は土与丸村との境である古川まで、西は西条東村との境である半尾川までで、東西に走る西国街道に沿って細長く町並みが発達し、総延長は約 870m を測りました。

杵形（ますがた）は宿場の中心を示す街道の屈曲ですが、ここには藩や幕府の通達文を掲示する制札場（せいさつば）が設けられました。また、杵形のやや北東側には広島藩の本陣（御茶屋）がありました。通常御茶屋は民家を利用するのですが、四日市は広島藩によってつくられました。

3・調査の概要（平成 12 年度分）

平成 12 年度は栄町地区を 5 月～6 月、本町地区を 8 月～2 月（平成 13 年）にかけて発掘調査をおこないました。

これまでの発掘調査で、四日市宿では土地利用するにあたって整地や地盤改良が何度も試みられていたことがわかっています。調査ではこの整地層を一枚一枚剥ぎ取ることで時期毎の生活面を把握する方法をとりました。整地層の厚さは場所毎に異なり、整地された土層が厚く残っているところと、削られて非常に薄くしか残っていないところ、あるいはまったく残っていないところもありました。

2 つの調査区で掘立柱建物跡 2 棟、礎石建物跡 2 棟、石列を持つ建物跡 6 棟、井戸 67 基（このうち石組みの井戸 3 基）、溝 42 条（このうち石で組んだ溝 7 条）、埋甕 82 基、埋桶 36 基、土壙 363 個などを確認しました。

今回の調査では前回の調査（平成 11 年度）のような江戸時代の絵図面に対応する遺構は見つかりません。しかし、調査区全体を見てみると江戸時代後期（18C 後半から 19C 前半）の遺構がもっとも多く、江戸時代に宿場町として栄えたことをうかがえる結果でした。

調査をしていると用途のわからない穴に頭を悩ますことが多いのですが、先人の生活の匂いを色濃く感じたものに井戸・桶（おけ）・甕（かめ）の 3 つがあります。使用目的がある程度想像できますし、比較的まとまってみつかったこともあって、「ここが井戸端だったのだろうか」とか、「炊事場だったのだろうか」「何を作っていたのだろうか」「人が大勢集まって賑やかだったのだろうか」など当時の人々の日常生活に思いをはせることができる遺構でした。

4. 出土遺物

主な出土遺物は、中国産（景德鎮や龍泉窯）の陶磁器・国産（肥前^{いぜん}や瀬戸・美濃、備前、京焼など）の陶磁器・土師^{はじし}質^{どぎ}土器・瓦・古銭・銅製品（かんざしなど）などです。数量としては、コンテナ箱に 680 箱分ありました。陶磁器類をみると、18 世紀末から 19 世紀はじめのものがほとんどですが、17 世紀代のものも多く、初期伊万里などの古い陶磁器も一定量見つかりました。また景德鎮（けいとくちん）や龍泉窯（りゅうせんよう）といった中国からの舶載品（はくさいひん）も見つかっています。種類は、碗や皿などを中心にすり鉢、甕、壺、徳利、紅皿、灯明皿などのさまざまな日常雑器です。

瓦は 18 世紀代に位置付けられる瓦溜まりから黒瓦と赤瓦が混在してみつかり、赤瓦の出現時期を検証する良好な資料になると思われます。また E 地区東側から古銭（寛永通宝^{かんえいつうほう}）約 1000 枚がまとまって出土し、本遺跡ではじめての大量古銭出土であると同時に、全国的に見ても数少ない出土例として注目されています。

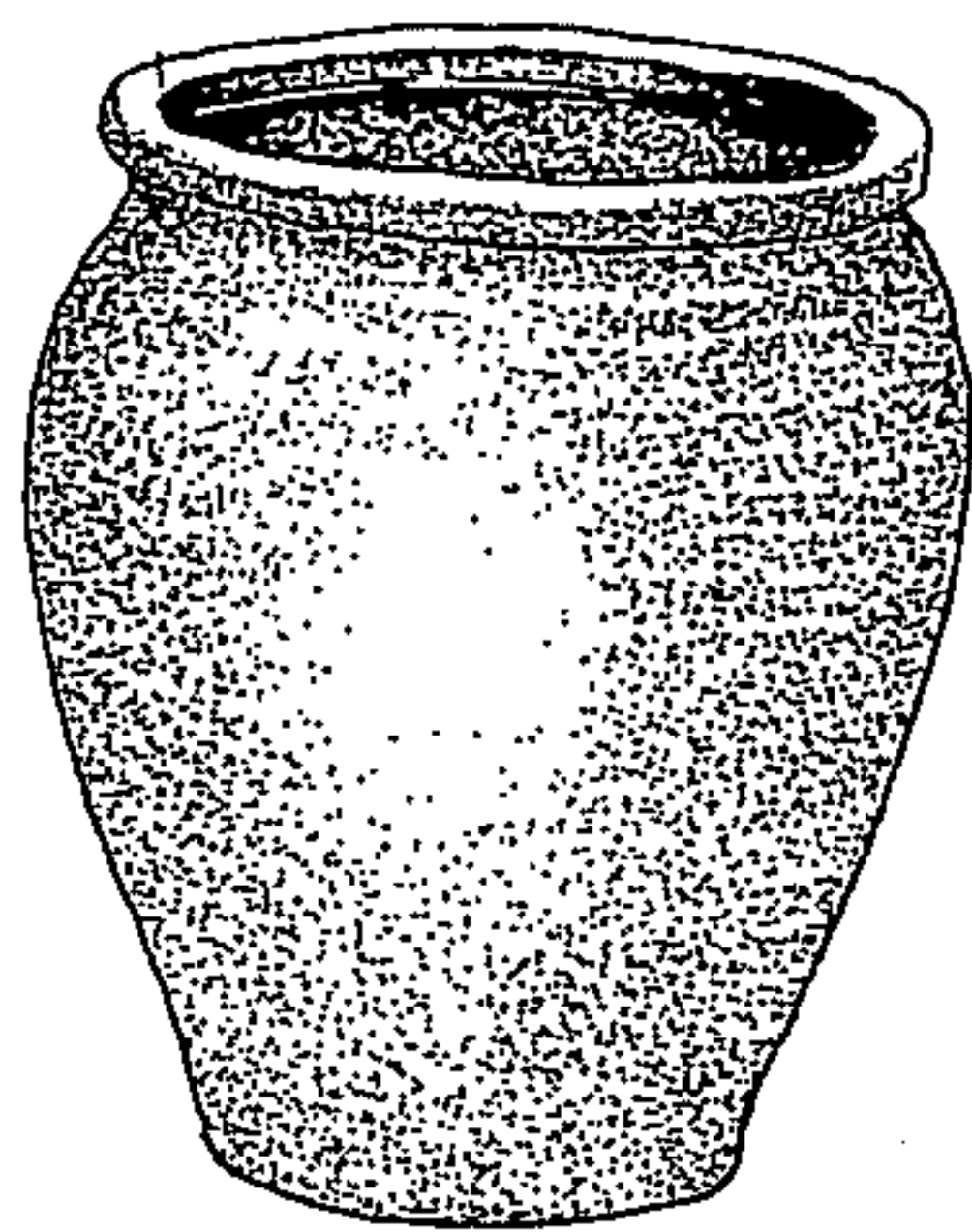
また弥生土器や石斧^{せきき}（弥生時代中期）、奈良時代の須恵器^{すえき}も出土しています。今回の調査ではその当時の人々の生活跡は見つかりませんでしたが、これらの時代にも人が生活を営んでいたことは十分に考えられます。

5. まとめ

今回の調査では、絵図や文献資料のような町並みを示す建物跡は明確には検出されませんでした。しかし、井戸や町割を意図した溝、多数の整地跡、さらには豊富な遺物、井戸・桶・甕などは四日市宿のにぎわいを今に伝えています。

またこの辺りの地域は溝などで縦に細長く区画がされており、家の間口で税金が決まっていた江戸時代の町の風景を今に残しています。区画に利用された溝（排水溝）も絵図面に類似する場所に残っていました。しかし、現在確認できる限り石の積み方などは非常に新しいものでした。考えてみると、生活に密着した溝はその時代その時代で幾たびも造りかえられ、手を加えられてきたのでしょう。そしてそのことはこの地域に人々が住み続け、生活し続けてきたことの証であるといえるでしょう。



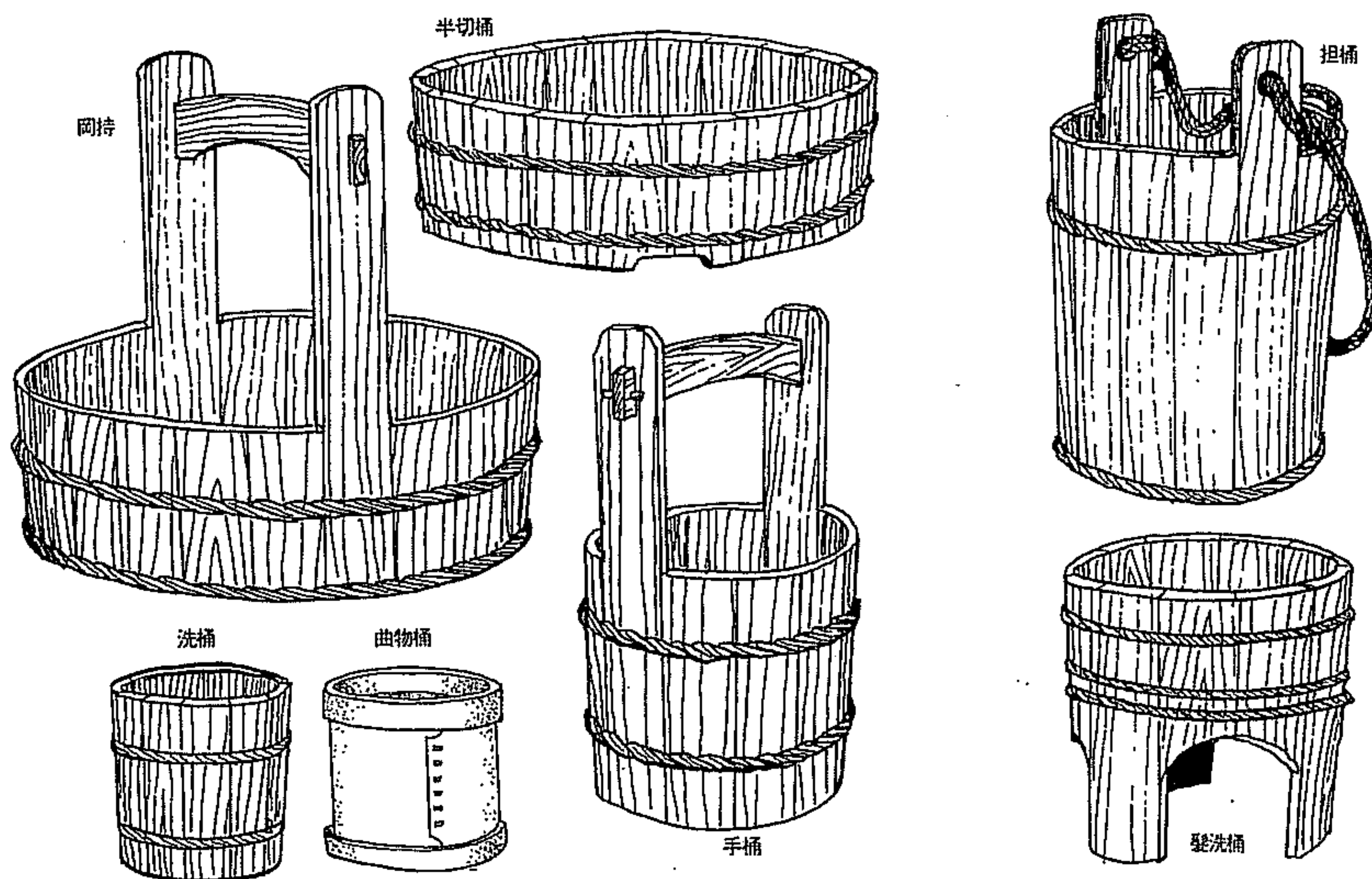


油甕



水甕

甕の種類



岡持

半切桶

担桶

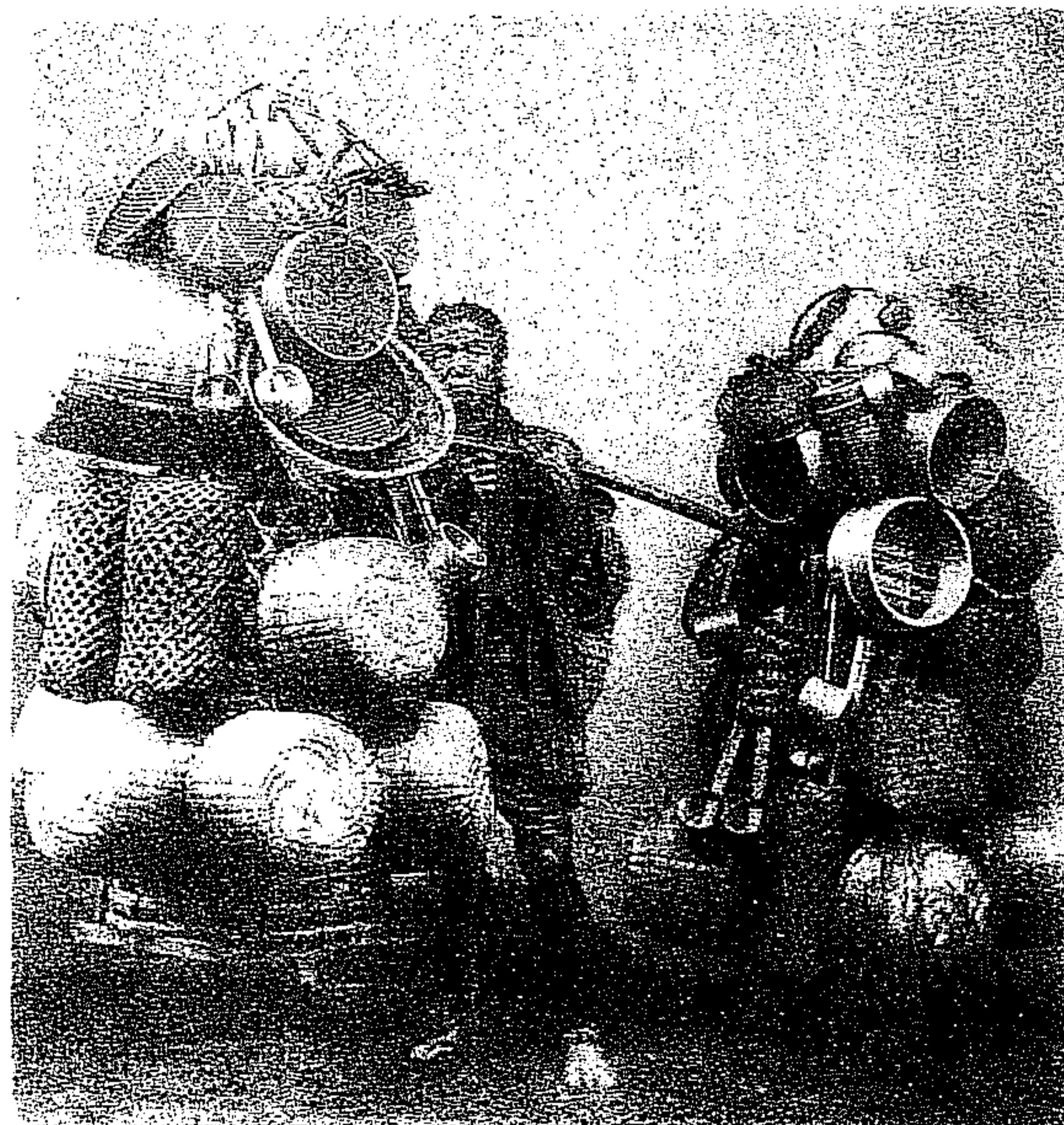
洗桶

曲物桶

手桶

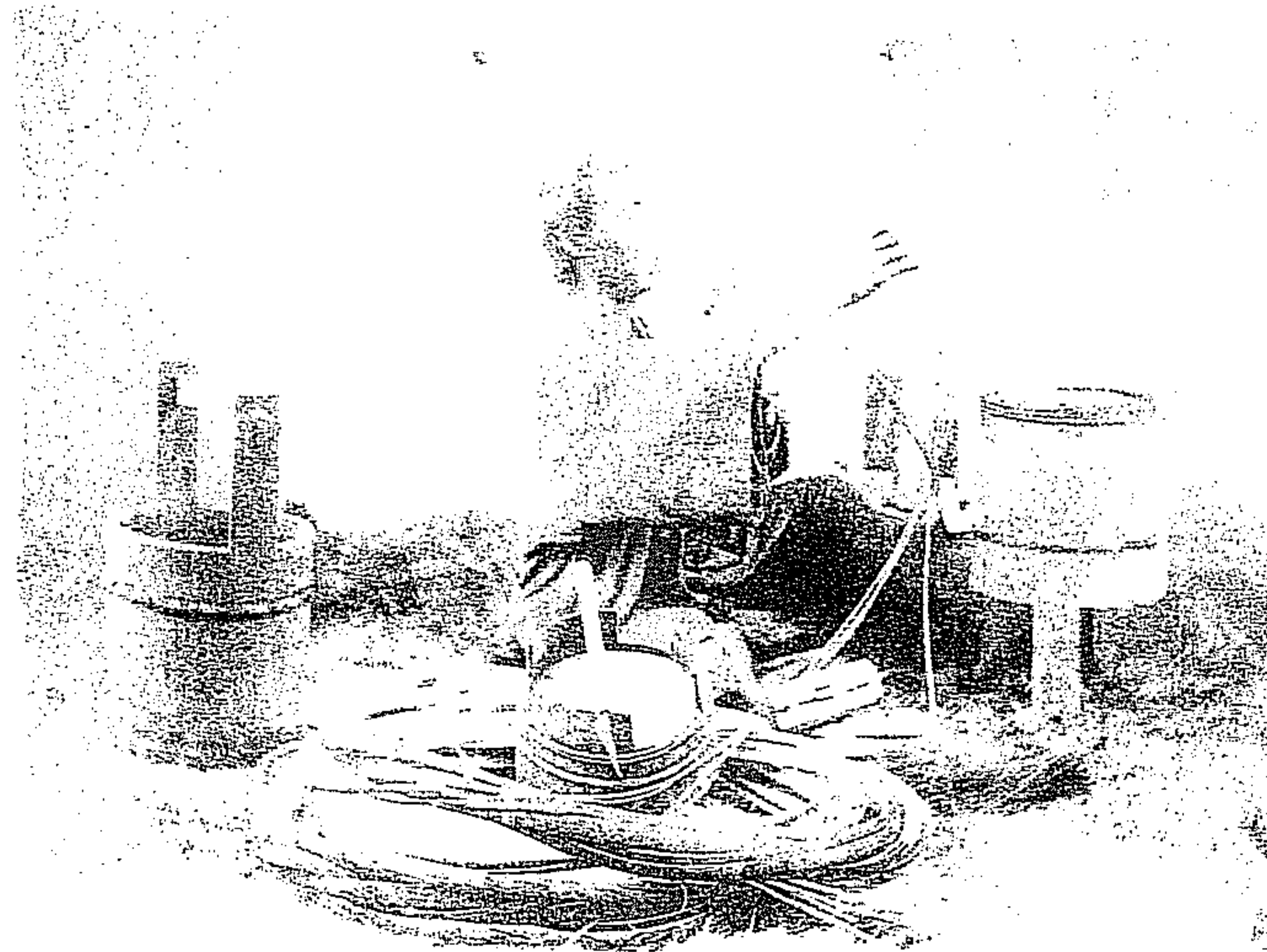
髪洗桶

いろいろな桶



ざる売り

ざるだけでなく、柄杓・杓子などの日用雑貨品もあついていた。



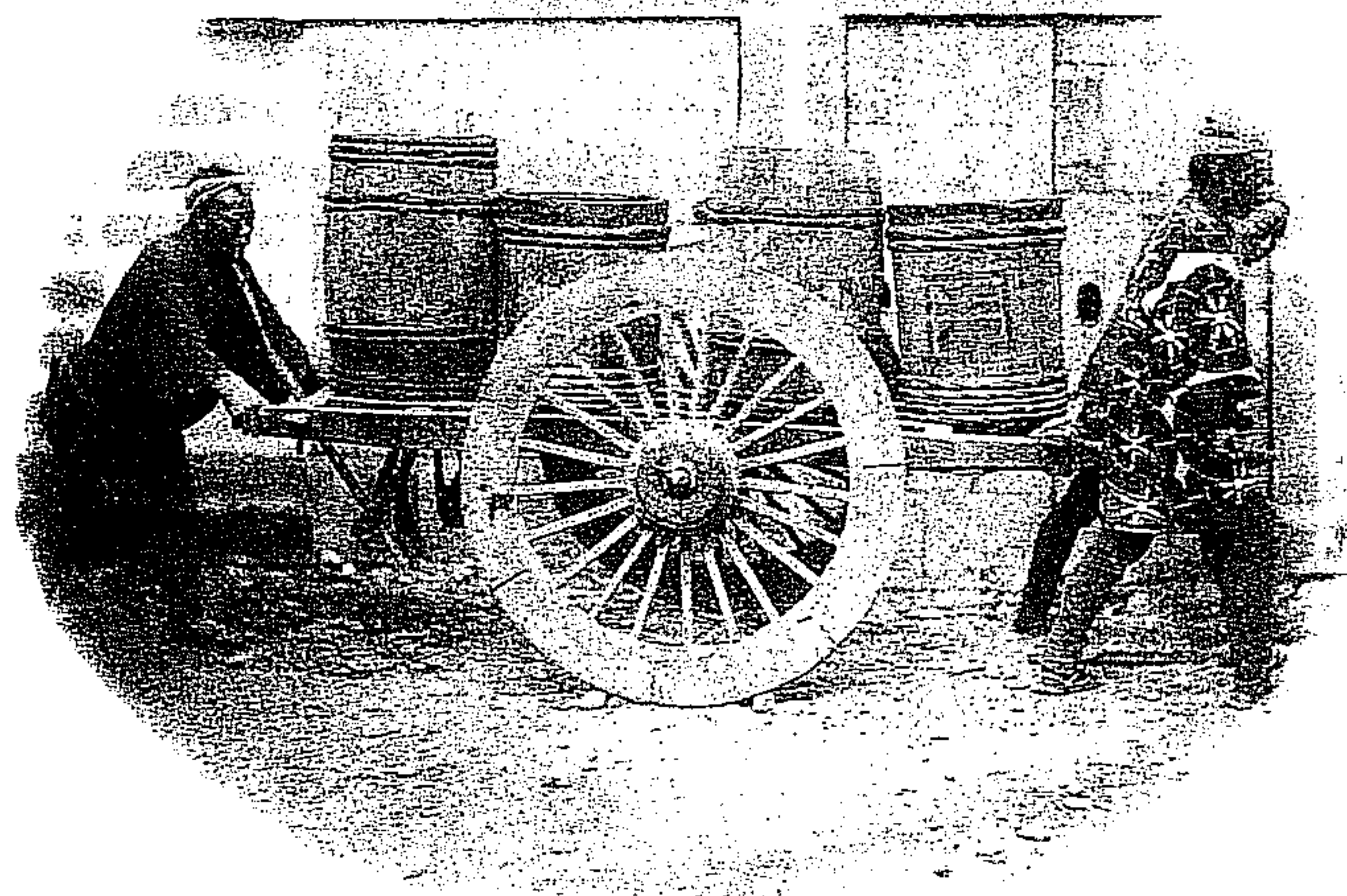
桶職人

職人が竹製のタガを丸めているところ。ゆるんだり、破損したタガを専門に直す職人もいた。



陶磁器屋

店の天井と棚にはすべて陶磁器が詰め込まれている。



大八車につまれた桶



行商人

商品を天秤棒に下げ、売り声をかけながら町々を回った行商人を「振り売り（棒手振）」といった。



白酒売り

雨天・防寒用の蓑笠を着けている。

《参考文献》

『ちょっと昔の道具たち』 文 岩井宏實、イラスト 中林啓治 河出書房新社
『新版写真で見る幕末・明治』 小沢健志編集 世界文化社